根岸小

自分のこととして課題解決する子の育成

～解決の見通しをもたせるしかけや振り返りをさせる場の工夫～（２年計画の２年次）

校長　　長倉　一志

１　研究主題について

本校では、教育目標である「かしこく　やさしく　たくましく」の具現化のために、昨年度は「自分のこととして課題解決する子の育成～解決の見通しをもたせる場と振り返りをさせる場の工夫～」という主題を掲げブロックごとに算数科の授業研究を行い、研究を進めた。その結果、次の３つの成果があがった。①解決の手がかりとなりそうなことを児童の気付きなどから確かめ、解決の見通しをもたせてから自力解決をすることによって、児童が意欲的に学習に取り組むようになってきた。②前時の振り返りを生かして本時との違いを見付けるなどし、本時のめあてを明確にしてから取り組むというパターン化した学習の流れを行うことによって、見通しをもって、安心して学習に取り組むようになってきた。③導入段階を前時の学習を振り返る場、展開段階をこれまでの学習を振り返る場、終末段階を本時の学習を振り返る場といった振り返りの捉え方の幅を広げた授業づくりをすることで、学びの確認を必要な時にすることができた。しかし、児童の実態として、「粘り強く取り組むことが苦手、集中が長く続かないなどの理由から、基礎的・基本的な知識・技能が定着していない。」ことと「自主性・自立心が弱く、自分の考えをもてない。自分の考えがあっても自信をもてず話せない。」ことが課題として残った。また、学力諸検査等においても、知識・技能の結果は高いとは言えない。「身に付いた」という実感をもてず、主体的に学習に取り組む態度も弱い児童が一定数みられた。

そこで、今年度は、解決の見通しをもたせるしかけや振り返りをさせる場の工夫をしていきたいと考えた。解決の見通しをもたせるしかけとして、①視覚支援、分割した提示、一部を隠すなど、問題把握の時のしかけ②既習と未習のズレ等から問いをもたせ、めあてを明確にするしかけ③児童の気付きや思考を生かした、解決の見通しをもたせるしかけを行い、自力解決のスタート時に全児童の手が動き出すことを目指す。また、振り返りをさせる場の工夫として①思考が変化したことを視覚化する②振り返りを行い、自分の変容に気付いたり、互いに認め喜び合ったりできる場の工夫をする③児童のよい考えや態度を価値付けすることに取り組む。このような工夫をすることで、「自分のこととして課題解決する子の育成」に迫ることができると考える。

今年度の学校目標は「より良く変容し互いに認め喜び合える児童の育成」である。基礎的・基本的な知識・技能の定着に努め、学習における意欲の向上を図り、学力全体の底上げをしていきたい。

２　研究のねらい

よりよく変容し、互いに認め喜び合いながら、自分のこととして課題決する子を育成するために、解決の見通しをもたせるしかけや振り返りをさせる場の工夫をすることが効果的であることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

(1) 解決の見通しをもたせる場面では、問題把握の時のしかけ、めあてを明確にするしかけ、児童の気付きや思考を生かした解決の見通しをもたせるしかけを工夫することで、主体的に取り組むことができると考える。

(2) 振り返りの場面では、前時までの学習や生活経験、既習事項を想起させたり、できるようになったことや身に付いたことの確認をしたりする場を工夫することで、学習内容の習得や思考の価値付けを実感することができると考える。

４　研究内容

(1) 主体的・対話的で深い学びを実現する指導の工夫・改善

ア　問題解決的な学習を取り入れた授業づくり

イ　言葉で表現できる力を伸ばす授業づくり

ウ　特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり

エ　１人１台端末を活用した授業づくり

(2) 基礎的・基本的な知識・技能の定着、表現力の育成

ア　家庭学習パワーアップ週間や算数科パワーアップテストの実施等による知識・技能の定着

イ　読書の充実

ウ　朝の活動を活用した基礎的・基本的な知識・技能の定着

(3) 学習に向かう姿勢（集中力・粘り強さ）の育成

ア　ねぎしっ子スタンダードを活用した基礎的な学習規律の定着

5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・講師・成果・授業の概要　等
6	7	第１回　授業研究 ４学年「垂直・平行と四角形」　授業者　教諭　大嶋　和明
7	１１	第２回　授業研究（要請訪問） １学年「ひきざん（１）」　授業者　教諭　古里　侑香子 講師　八戸市教育センター 主任指導主事　小向　一樹先生
１１	２９	第３回　授業研究 ６学年「場合を順序よく整理して」　授業者　教諭　飯村　優希

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
6	１４	「ＡＥＤ等の使用方法について」　講師　本校養護教諭　中山　夏子
8	２３	「特別支援教育を取り入れた授業づくりについて」　講師　本校教諭　中村　久美子 宮崎　千登理 堀　貴子 本校講師　川井　和泉
１０	２５	「体育科・実技研修」　講師　八戸市総合教育センター 主任指導主事 石井　利正先生

6　研究の成果

(1) モニターを用いたり、身近な題材を使ったり、教師がわざと誤答をしたりするなど、問題把握時のしかけを工夫することで、児童が興味をもって、学習に取り組むようになってきた。

(2) 既習事項等をもとにめあてを明確にし、解決の見通しをもたせるしかけを工夫したことで、同じスタートラインに立って自力解決に向かわせることができ、児童が学習に意欲的に取り組むようになってきた。

(3) 様々な場面で振り返りをさせることができるようになってきた。終末だけではなく、導入時や展開時にも振り返りをしながら授業を進めていくことで、児童の実態に合わせながら、学習を習得させることができた。

7　研究の課題

(1) 解決の見通しをもたせ、自力解決をスタートさせる際、全児童の手が動き出すことを目指していたが、上位の子には丁寧すぎたり、下位の子にはより丁寧な見通しのもたせ方が必要だったり、手ばなすタイミングが難しかった。

(2) 終末の振り返りは、時間の確保が難しく、思考の価値付けを実感させるところまではたどり着けないことが多かった。導入・展開時の時間配分等のバランスを考えた授業の組み立てをしていきたい。また、書かせる際には、内容項目の吟味・系統性を示していきたい。

（記入者　岩城　裕美子）